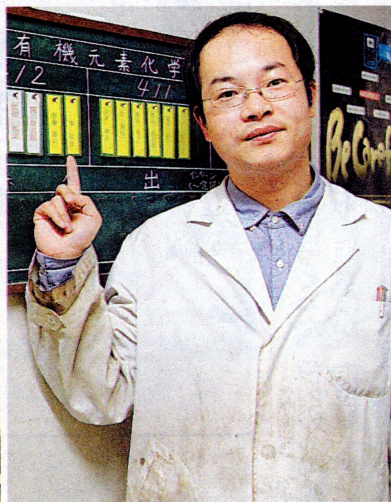


内向き 打破しよう



鈴木章
さんの



メッセージ

北大の挑戦

2

理科系で学ぶ大学院生や若い研究者が、研究のために海外へ「武者修行」に出なくな

った。そう言われて久しい。北大で博士号を取得後、米国のパデュー大で2年間の研究生生活を送った鈴木章さん(80)は語っている。「ファイティングスピリットがなくなっているのかな。そんな状況を打破することを考えないと」

㊤X線解析装置で実験するホセさん㊦鈴木章さんの研究の流れを組む「有機元素化学研究室」に所属するリーさん=いずれも札幌市北区、北海道大学

∞ ∞

「博士課程の3年間で計550万の給与支給」「英語で単位を取得できる講義の充実」「世界各国の大学の著名な研究者を集めた集中講義」。

アジア一の「化学研究拠点」を目指し、化学分野の博士留学生向けに北大が打ち出しているメニューだ。2007年度に、国際的に卓越した研究拠点を重点的に支援する文部科学省の「グローバルCOE」に採択され、学生への給与の大部分もCOEの予算で賄われる。

留学生の給与は、アジアの頭脳が欧米に流れるのを防ぐためにも、米国並みの額にした。優秀な学生を入学させようと、留学生の選抜には国別に2人ずつ教員を派遣し、英語での面接や議論を経て合否を決める。昨年度は中国から35人が受験し、合格者は15人という厳しさだった。

このプログラムに伴って、化学系の博士課程の学生は、3人に1人の割合で外国人留

給与支給 アジアの頭脳集める

学生となった。

中国出身のリー・ガオ・チアンさん(28)は、米国に留学する仲間をよそに北大を選んだ。理由は「北大は『鈴木・宮浦カップリング』で有名だから」。鈴木カップリング反応を使って液晶素材を簡単につくる研究に励む。

フィリピンから来ているジュディ・フェ・ホセさん(27)は、北大への留学経験がある恩師に薦められた。「日本にいながら米国や中国、ロシアなど世界の研究者の講義を受けられるのが魅力」と語る。

プログラムリーダーは、鈴木さんの共同研究者だった宮浦憲夫・特任教授(64)。北大がアジアの人材育成を担うとともに、大学自体を国際化することで日本人学生を刺激する狙いもある。

∞ ∞

一方、大学は欧米諸国にも視線を向ける。北大は昨年、国際大学協会(本部・パリ)に外部評価を依頼した。各国の評価委員が複数回、北大に

足を運んで教育や研究の環境などを調べた。ある委員は「こんな立派な大学とは知らなかった」という好印象を語ったという。

北大の外国人留学生数は今年度、10年前の約2倍の1162人。大部分は、中国、韓国、台湾、インドネシアなど東・東南アジアの学生だ。国際交流担当の本堂武夫副学長(63)は「これまで欧米にはPR不足。知名度も低かったのでしょう」と認める。

国際競争を勝ち抜くためには、アジアだけでなく世界に北大ブランドを売り込む必要がある。そこで、海外の大学・学生らが何を求めているかといった情報を収集したり、北大をPRしたりする「国際オフィサー」を配置することを決めた。

12月から来年3月にかけて計8人のオフィサーを順次雇用し、それぞれ担当する国を歩き回る。「欧米へのインパクト」という意味では、鈴木先生のノーベル賞受賞は大変大きい」。本堂副学長は期待もにじませる。